CSセミナー2018年　午前の部

日時：2018年5月19日（土）
会場：大阪クリスチャンセンター
講師：大嶋　重徳　牧師（キリスト者学生会（KGK）総主事）
午前の部 『信仰継承と教会教育』

1．はじめに

教会の中に青年が減ってきました。青年だけでなく牧師も減少しています。日本の教会は、50歳以上の牧師が全体の何割だと思いますか。50歳以上の牧師は全体の9割にもなります。だから、40歳台の牧師先生を大事にしましょう。
教会の高齢化が進み、日本キリスト教団では毎年5000人の信徒が減少しています。
いのちのことば社発行の「成長」発行部数は減少していないそうですが、CSを実施している教会は全体の半数以下だと言われています。

CSが減少している理由として、主に次のことが考えられます。
①そもそも子どもの数が減ってきている。
②治安の悪化、宗教に対する恐怖心
親が子供たちだけで教会にいかせなくなてきています。
③魅力的な娯楽の増加
子供たちむけの魅力的な娯楽が増えています。教会のテキストは今の時代の子供たちに適合しているでしょうか。家ではスマホやゲーム機で遊んでいるのに、教会に来たらペープサートや紙芝居をやっているということもあります。戦後、宣教師達から学んだ手法をまだやっている。まぁ、一周まわって新しいと言えるかもしれませんが。教会のプログラムが、自分達の日常とかけ離れていて「我慢」が発生していないでしょうか。かって教会では、子供たちは「マジョリテイ（多数派）」でした。教会の中心に子供たちがいた。今では、「マイノリティ（少数派）」になっています。教会の予算も、子供たちからお年寄りにシフトしています。

聖書　マルコによる福音書第10章13－16節
「10:13 さて、イエスにさわっていただこうとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。 10:14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。 10:15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。」 10:16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。」

【1】 幼児から小学生時代　子どもと共にする礼拝

この聖書箇所で、「イエスにさわっていただこうとして」、親たちが子供たちをイエスのところに連れてきました。ところが、弟子達は「しかった」と記されています。なぜ、弟子達は彼らをしかったのでしょうか。
①弟子達は、イエスが疲れているので気遣ったのでしょうか。
②ユダヤ社会では子供というのは排他される存在だったからでしょうか。

③イエスの説教の邪魔をさせたくなかったからでしょうか。

この弟子達に対して、イエスは憤られました「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。

憤るというのは、子どもたちを軽んじるものに対する厳しい態度と、子どもたちに対するイエス様の思いが鮮やかに記されている箇所です。

ここで、「このような」とは、９章に記されている「謙遜」という意味での、「子どもたちのように」ではなく、「この種類の」「この階層の」という意味です。子供たちは神の国の住人なんだ、とイエスはおっしゃっているわけです。この記事は、今日の私達の教会のあり方を問うています。

①「大人の礼拝」という言葉

「大人の礼拝」という言葉があります。この言葉は聖書には出てきませんが、普段私達が口にしている言葉です。この言葉は、礼拝における子供たちの位置を表しています。礼拝から子供たちを締め出している。子どもはCSに出ていればいいと言っている。子供たちがイエスのみもとにきたことを「しかった」弟子たちと同じ要素が含まれている。

でもイエスは「子供たちは神の国の住人だ」とおっしゃっています。子供には礼拝に出席する権利があります。

多くの教会で「献児式」を行っています。これは、子どもが信仰を継承するまで、教会が子供たちをささえるという決意をする場です。子どもたちを礼拝に参加させるという強い決意です。

鳩ヶ谷福音自由教会（大嶋先生の在籍している教会）では、母子室はありません。子ども達がさわいでも礼拝を出て行かなくて良い。霊的にからからに渇いている、あの若いお母さんたちを礼拝から締め出してはいけない。主任牧師は、礼拝では子どもが我慢する必要はない。我慢は大人がすればよいと言っています。子どもが騒ぐのはほんの１、２年のことですよ。ある程度大きくなってくると、礼拝では静かにするもんだと自然に学んでくる。子どもが騒いでも大人が子どもをじろっと見ることはありません。子ども達どおしで「しーっ」ってやっていますよ。このような教会をつくるには１０年かかります。子ども達もふくめて、神の家族としての礼拝です。

②説教に子どもたちの場所はあるだろうか。

礼拝の中心に説教があります。この説教に子ども達の居場所はあるでしょうか。教会の人数は牧師の年齢の±１０歳と、牧師の子どもの±１０歳が多いと言われています。この年代は、牧師の生活圏にいるから説教が届きやすいのです。でも、このことを意識せずに放置しておくと、やがて年齢を重ねることによって説教が届かなくなっていきます。このことを防ぐには、子どもたちが説教をどう受け取ったのか、きちんと受け取りにいく必要があります。私は説教後に中一男子に「今日の説教はどうだった」と聞きにいきます。メッセージがどう受け取ったのか。彼らの分かち合いの中で、私が語った言葉と違う言葉で分かち合われる。その言葉を手に入れることで、彼ら世代に届く言葉を手に入れることができる。

以前、説教中に必ず寝る双子の兄弟がいました。彼らはどんな説教でも必ず寝るんです。なんで寝るのと聞くと、彼らにとって教会は楽しくてしかたがない。教会学校は楽しくて仕方が無い。しかし苦痛なのはあの礼拝だというのです。こどものときは宿題やったり、本を読んだり、漫画読んだりしながらなんとかやりすごす。しかし、高校生ぐらいになってくるとそれも使えない。方法は、寝るということのみしか苦痛の時間を乗り越える術がない。そうすると彼らはどんな説教でも寝る体になっていった。

子どもの時代に礼拝説教に親しむのはとても大切です。説教中に塗り絵をしているのは、礼拝の邪魔をしないというだけで、霊的には何の益にもなっていません。

私（大嶋先生）が、ある教会で講師として呼ばれたときに、説教のやり方でリクエストを受けたことどもたちも礼拝に加わることができます。

1） ザアカイは何の木にのぼりましたか。これは聖書を読めばわかります。

2） ザアカイはイエス様に声をかけられたとき、どのように思いましたか。この質問は、説教を聴いていないとわかりません。

3)あなたは、イエス様に出会ったとき、イエスさまにどのように応対しますか。これは説教に応答しないと答えられません。

このクイズを解きながら説教を聞きます。だから必死で聞きます。

③両親に信仰継承を学ぶ機会を設ける。

イエスさまのもとの子ども達を連れてきたのは誰か。多くの聖書学者は親であったであろうと言われます。教会に若者がいないといわれますが、実際には若い人がいないのではなく、初代のクリスチャンから2代目へのクリスチャンへの信仰継承がうまくいかなかったことが原因ではなかっただろうかと思います。

私がKGKの学生たちをみていると、3代目や4代目のクリスチャン達は、圧倒的な安定感を持っています。生まれた時から、おじいちゃんおばあちゃんも含めて全員クリスチャン。幼稚園に入り、小学校にはいったときに、突如気づく。あ、クラスでクリスチャンは俺一人という驚愕事実。しかしそれまで、神様がいないなんて考えたこともないという幼少期を過ごす。彼らにとって神体験、神存在は否定できないほど自然なことになっているのです。

しかし、初代から見ると、3代目、4代目はピリッとしない。もっとぐいっとこいよみたいな。そして初代のクリスチャンは2代目に対して、自分達と同じようにイケイケを求めることがある。自分は信仰をもって燃やされているが、信仰継承したわけではないから、信仰継承のやり方がわからない。その結果、無理やり押し付ける。または、「私達も選んだのだから、あなたも好きに選びなさい」と言って、信仰継承を放任する。信仰は「どっちでもいい」ものなのでしょうか。こうして、信仰継承の方法が両極端になる傾向があります。

日本の教会は熱心に伝道してきました。その結果、多くの人が教会にやってきました。でも、同じ数だけ去っていきました。信仰継承が日本の教会の文化になっていく必要があります。信仰継承は親だけの問題ではありません。私達は助けながら、助けられながら子ども達へ信仰を受け継いでいかないといけなのです。

④家庭礼拝の勧めと励まし

宗教改革500年経ちましたけれども、宗教改革以来、信仰継承の鍵は家庭にあるとされています。宗教改革のスイス、ドイツでは教会役員が各家庭をまわり、ちゃんと家庭礼拝をやっているかとチェックをしにいくというのがあった。信仰継承において家庭の信仰、とりわけ家庭礼拝というのが大切にされてきた。

私の妻が「家庭礼拝をやろう」と言ったとき、「嫌だなぁ～」と思いました。家庭礼拝には嫌な記憶しかない。昔、私のおかんが「家庭礼拝」をやると言い出して、クリスチャンではない父も巻き込まれて家庭礼拝をしたことがあります。父が聖書を読んで「ここがわからん」と言いました。おかんが私に「重徳、あんた分かるか」と聞きます。「いや、俺もわからん。おかんは。」「私もわからん」。これで家庭礼拝は終了しました。続かないんです。だから妻が家庭礼拝をやろうと言い出しとき、嫌でした。

だからラフなスタイルにしました。5分、10分程度。布団に寝転びながら、みんなで賛美して、暗

唱聖句をしてお祈りをする。子ども達に神の前に出ることが嫌にならないようになって欲しい。そのようにやっていると、私達は子ども達のために祈るのだけれども、子どもたちも親である私のために祈るようになってきてくれました。私は講師で呼ばれることが多いので、家にいないことがあります。そのような時、妻が子ども達に「お父さんはきょう、どこそこに行っている」と説明してくれます。すること子ども達が私のために祈ってくれるという経験をしてきました。

【2】小学校高学年の時代

①クリスチャンホームの子どもたちを大切にすること

小学校高学年になると、子どもの参加数が減ってきます。小さいうちは、友達に誘われて教会に来ていた子ども達が、だんだん来なくなります。残っているのはクリスチャンホームの子どもたち。そして、家庭で居場所が無かったり荒れている家の子どもたち。そこでおきることは、クリスチャンホームとノンクリスチャンホームの子ども達の精神的ないさかいです。この時に大切なのは、クリスチャンホームの子どもが大切にされるということ。大人はついついノンクリスチャンの子どもを大切にしようとします。そしてクリスチャンホームの子どもに我慢を強いてしまいます。牧師師弟はこれが特に多い。牧師師弟も親の仕事の助けをしたいから、ついつい我慢をします。しかし、牧師師弟だからといって、我慢して当たり前、奉仕をして当たり前ということは決してない。「あの子に声かけてきな」「えっ、俺！？」みたいな。クリスチャンホームだから出来て当たり前では決して無いんです。

この時期に、子どもたちの中に教会理解が形成されていきます。青年期になって伝道できない子どもは、この時期に教会がつまらないという経験をしています。自分は教会を愛していきていく。でも自分の友達を誘えるかどうかは別問題。大切な友達であればあるほど連れてきたくない場所が教会。大切な友達が教会にきてつまらなさそうな顔をしていると、自分までつまらない人間とおもわれるんじゃないかというリスクをかかえる。そして「来週はもういいや」と言われると、自分がもういいやと言われているような不安におちいる。この時期に子ども達が教会がすきでしかなたないという経験をさせてあげないといけない。

②子ども達の実態に沿っての教会学校

中学校に入ると、部活が原因で教会に来れなくなると言われていますが、実態はそうではありません。クリスチャンホームの子どもたちにとって、小学校高学年に我慢をさせられ苦痛を感じている。周りの友達は教会に来ないが、自分にはいまだ親の強制力が働いている。もちろん、忍耐や我慢を教えるのは重要なことですが、大人の都合で我慢をさせるというのは意味がないことです。現代の教会で起こっている問題の多くは、小学校高学年で起こっている。

このタイミングで教会学校で用いている教材の見直しをおこなっていく時期がきている。

③小学校高学年の彼らの疑問に応えてくれる教師の配置

こどもたちにとっても疑問がわいてくる時期なんです。なんで自分は日曜日に教会にいっているんだろう。本当に神はいるのか。神を信じて生きるとは何なのか。そういった疑問に応えられる教師がいるでしょうか。彼らに寄り添う教師がいるでしょうか。彼らの問いに本気で対応しているでしょうか。そういうことが教会に問われている。

小学校高学年の女の子にとって、自分はどのグループに属することができるかというのは、生活の死活問題です。学校にいけるかどうか決まってくる。そして自分はなんでこんな性格なんだとおもっている。色んなことに悩み始める時期です。生きるとはなんなのか。神様とはなんなのか。こ

の疑問がそだってくる時期に彼らの問いに本気でこたえてくれる教会学校の先生、あるいは説教が教会学校の中でなされているか。本気で小学生によりそってくるCS教師を小学校高学年に配置すべきです。できれば一緒にあそんでくれ、体力がある先生。小学校女子の気持ちがわかる、少し上世代のいけている、お姉さんが良い。嵐のメンバーくらい言えたほうがいい。私達もああいうお姉さんになりたいと思える教師。教会超おもしろいという経験を持つことが重要なんです。この時期に教会がおもしろいという体験をすると、それが原体験となってあとからどんどん育っていく。

④カテキズム教育（キリスト教の教理をわかりやすく説明した要約ないし解説）

中学校に入ると、つかず離れずの時期を迎えるが、その鍵は小学校高学年。もっともCS教師の説教力が問われる時期。その時期に、彼らに響く説教がされているだろうか研究しないといけない。「成長」を読んで、そのまま話すだけの説教をしていないか。教師にとって、説教をしたという満足感を得られるかもしれないが、そのような説教は、彼らにとって苦痛でしかたない。子どもたちの人生に役にたっていない。部活の顧問が言う言葉の方がよっぽど響く、塾の先生の言葉の方がよっぽど役にたつ。そうなってしまう。

説教では、もっと教理が語られていいんじゃないか。教会って何なのか。人が生きるとは何なのか。その教理を教師は自分の言葉で語ることができるか。教理を難しい言葉でかたることに意味ないんです。その教理を自分の言葉でかたらないと意味がないんです。自分の信仰を、自分の信じていることを彼らに届く言葉で準備できているでしょうか。

⑤礼拝における奉仕の場所

礼拝に居場所をもつということを考えていくときに、子ども達がよろこんでできる奉仕の場所をもうけることです。ある教会では子どもたちが献金係をしています。おじいちゃんたちは、これを結構喜ぶ。頭をなでながら、今日はいつもより多めに献金しようかなんて言っている。子ども達が重要な礼拝に携わっていく。

【3】中学生、高校生の課題

①部活と教会、声をかけ続けられる工夫を

この時期に教会に来なくなるのは、日曜日の部活などさまざまな事情がある。この時期に言ってはいけない言葉があります。「ひさしぶり」。この言葉は、「ずいぶん教会に来ていなかったね」という責めに感じられます。「ひさしぶり」ではなく、「待っていたよ」と声をかけてください。君がきていない時期にも君のいる場所があって、ずっと祈っていたよ。これは、祈られている、自分の居場所があるという経験になります。

②中高生向きのイベント。部活が終わったら来れる時期のイベントの準備。

小さくでも良いから、中高生向けのイベントをやっていく。多くの人が来る必要はない。一人の人が大切にされていうことが大切なんです。クリスチャンホームしか集まらなくても良い。彼らが大人になった時、自分のためにどれだけの犠牲が払われてきたかがわかるようになります。それがわかると、彼が大人になってとき、中高生のためにやってあげることができるようになります。

③早天礼拝、夕礼拝の可能性

私が中学生の頃、日曜日に部活をする私のために、牧師は早天礼拝をしてくれました。そして礼拝が終わると、「重徳君のプレーが、神様の栄光を表すように」と祝祷をしてくれます。祈っても

らってから部活に行き、祈ってもらってプレーをする。私は試合をするとき、「このプレーは神の栄光を表すためにするんだ」と思っていました。部活も勉強も祈りによってサポートする。

④中高生、大学生キャンプの再検討

学生時代に同世代の信仰の友人に出会うことは大切です。「うわっ、こいつマジで信じている」という人に出会うと、自分とのあまりの違いに衝撃を受けます。そういう人との出会いは、大人が与えることができません。だからキャンプは大切なのです。30 人くらいのキャンプをやっているなら、他の教会と合同を検討した方が良いです。いつも出会っている、慣れ親しんだメンバーだけだと出来上がっている。100 人クラスの人たちと出会うと、それだけで衝撃です。学校では、自分以外にクリスチャンがいるかどうかわからず肩身の狭い思いをしているのに、キャンプにくるとマイノリティではない経験をする。

キャンプをするにはお金がかかります。信仰継承にはお金がかかるものなのです。そしてどういうキャンプをすれば子ども達の心に届くのか。

私は福知山のど田舎の教会でした。そんな教会だから大人になったらみんな都会に出て教会に残りません。それでも私達を、東京のキャンプに行かせてくれました。7，８人をキャンプに送り出すのに数十万円かかります。でも、この時期にお金をかけていかないと、彼らが都会で一人暮らしをしたときに、信仰生活がもたないのではないかという教会の姿勢がありました。

【4】大学生、青年

①交わり形成と教育の機会の再検討

この世代になると教会学校の対象ではなくなります。教会学校のスタッフとして参加する人はコミュニティがあるのですが、そうでない人は教会に居場所がなくなっていきます。青年になるとヘトヘトになるまで企業で働いています。若いんだから奉仕をして当たり前という時代ではない。そういう彼らに交わりを形成できる場所を提供できるか。彼らを家に招いて食事する家庭がどれだけあるか。青年会のプログラムに参加するには、彼らはつかれている。むしろ、食事に招いてあげる家庭がいくつあるか。

②結婚の課題

その交わりの中で、彼らは親以外のクリスチャンホームをみることができます。傷ついた家庭で育った青年が、クリスチャンホームを見ることができます。彼らが結婚に希望をもつようになるのです。もてなすというのは労力がいります。部屋の掃除もしなくてはいけない。私は学生時代、牧師の話は覚えていません。宣教師の先生が説教中、はっときづくと全員寝ていた。この宣教師の先生、すごい精神力ですよ。でも、この先生に招かれてご飯食べた記憶は鮮やかに残っています。メニューまで覚えています。教会での１０分の立ち話ではできない話が、家ではできる。罪の問題、性の問題、結婚の問題を祈ってあげられる。青年達にとってその経験は癒しであったり、なぐさめであったりする。

教会学校教育とは教会学校をどうするかでありません。一連のできごとなのです。仕事の問題、恋愛の問題にどう取り組んでいくか。

③労働、社会的使命の課題

彼らの労働についても考えていかなくてはいけません。それを世の中のこととして切り離しては

いけません。労働を神の国建設としてとらえていく。教会が、社会にクリスチャンを送り出していくという意識をもつ。仕事で教会になかなかくることができない。ある牧師はその会社の社員食堂で、教会の青年と一緒にごはんを食べていた。この青年は、本当に来るとは思っていなかったけど、きてくれるとうれしいものですと言っていました。そういう彼らの日常をささえてあげられるグループであったり、交わりだったりが必要なんではないかと思います。

【5】青年伝道担当の働き人を育てること

・若者に寄り添い、共に祈ってくれる存在

青年伝道担当の牧師をたてる教会がふえてきました。いわゆる副牧師とは違って、ユースパスターは青年のみに特化した牧師です。

①ユースパスターの採用

・ユースパスターを採用できる教会

・ユースパスターは何をするのか。

どうすれば青年が友達を連れてくることができますかと聞かれることがある。トップ2がある。まずはじめに、青年が友達を連れて来た時にわかる説教がある。青年は、友達が教会のイベントにはきてくれても礼拝にきてくれるかどうかは別だとわかっている。友達に届く説教があるか。

その次に、友達を迎え入れてくれる誰かがいるかということです。青年達も一生懸命伝道しようとするわけですよ。しかし、その友達が教会にきてひとりポツンと座っている。自分も奉仕者であるので誰か声をかけてほしいのだけれども、「あんたの友達でしょ」と言われる。ある青年が彼女を教会につれてくる。そしたら教会員全員、だまってじーと彼女を見ているというんです。そのうち役員さんがすくっと立ち上がって彼女に近づき、「住所はどこですか、電話番号は」。そういうことを聞いて欲しいんじゃないんだ。彼がどんな思いで自分の彼女を連れてきたのか。

彼らのために祈ってくれている、待ってくれている。待っていたよといってくれる誰かがいれば、彼らは教会に自分の友達を連れてこれる。

そういう誰かを、教会のなかでユースパスターとして、働き人としてたてられる教会が増えてきました。

・教区単位、2・3教会単位で採用する可能性

まぁ、しかしそれにはお金がかかるわけです。ある教団では、2，3の教会単位でお金を出し合ってユースパスターをたてているところもあります。

②ユースパスター採用の課題

ユースパスターを採用する難しさもあります。教会の中に、別の教会が誕生する危険もあります。ユースパスターをどう育てていくか。牧師とユースパスターの信頼関係が大切になってきます。

最後に

信仰継承は、「こうやったから、こうなった」というものではありませんし、言ってもいけません。私達は神様の憐れみがあるから、今があるのです。あの家庭は信仰継承が成功して、あの家庭は失敗したという判断は絶対にしてはいけません。その判断は、私達が神の前に立つ終わりの日まで留保しなくてはいけません。

私達が今日あるのは、私が立派だったからですか。そうではないでしょう。私達のために祈ってくれた誰かがいたから今日の私があるのでしょう。だとすれば、私達も教会のあの子のことを祈っていく。変えるべきことをちゃんとかえ、守るべきものはちゃんと守る。

ある教会の青年が牧師に言いました。先生達が求めている青年はどこにもいません。いるのは私達です。私達はどこかで私達好みの青年を求めていないでしょうか。奉仕に役にたつ青年、ぴりっとした信仰、言うことを聞く青年、和を乱さない青年を求めていないでしょうか。尊敬のないところに育成はありません。